

T・ガイガーの『資本論』批判について

岡 崎 栄 松

一 問題の限定

- 二 『資本論』にたいするT・ガイガーの批判——その一
- 三 『資本論』にたいするT・ガイガーの批判——その二
- 四 むすび

一 問題の限定

ここでその所説を検討しようとするテオドール・ガイガー(Theodor Geiger, 1891-1952)は、ひともしるように、いわゆる大衆社会論の見地に立つドイツ社会学者の一人である。彼はレオポルト・フォン・ヴィーゼ、アルフレット・ファイアカント、アルフレット・ウエーバーなどとともに、一九二〇年代のドイツ社会学界の重鎮と目されていた学者であった。一九三三年、ドイツの政権がナチスによって掌握されるや、彼はデンマークに亡命し、一九三八年にはその地でアーフス大学の教授となった。ナチス・ドイツがデンマークを占領したため、彼はさらに

スウェーデンに走りぐるをえなかつたが、戦後はアールス大学に復帰し、トロント大学（カナダ）の客員教授をも兼ねていた。

テオドール・ガイガーは、その生存中に可成り多くの著書を公刊しているが、いまその主要なものを刊行の年代順に示しておけば、下記のとおりである。

Die Masse und ihre Aktion, 1926.

Gestalten der Gesellung, 1928.

Die soziale Schichtung des deutschen Volkes, 1932.

Vorstudien zu einer Soziologie des Rechts, 1947.

Die Klassengesellschaft im Schmelzriegel, 1949. (鈴木幸寿訳『あたりし、階級社会』)

Aufgabe und Stellung der Intelligenz in der Gesellschaft, 1949. (鈴木幸寿訳『知識階級』)

Soziale Umschichtung in einer dänischen Mittelstadt, 1951.

Ideologie und Wahrheit, 1953.

ところで、T・ガイガーがカール・マルクスの『資本論』にたいして系統的な批判を試みているのは、一九四九年に刊行された『あたりしい階級社会』* (Die Klassengesellschaft im Schmelzriegel) においてであるが、この『あたりしい階級社会』がどんな問題意識のもとに執筆されたものであるかは、著者自身のつぎの一文のなかに端的に示されている。

「個々の場合、マルクスの諸主張が論難されるかどうか、それらが弁護されるかどうか。あるいは、マルクスの主張を現代的につくりあげ、そしてよりあたりしい個別的認識に適合するような研究がおこなわれて

いるかどうか。つまり、マルクスのな問題設定それ自体が、どこへもついても明白に、確固たる地位を占めるかどうか。

「本書はこのような学説論争をふたたびとりあげて、その論争をさらに継続しようとする意図はない。学説論争は部分的にいつて単に学理的な性質のものにすぎず、はるかに高い程度においては、かえつて政治的・扇動的な性格をもっている。ここで重要なことは、むしろ社会の実状を冷静に分析することによって、階級社会学説、とくにマルクス主義的説明における階級社会学説にいかなる現実的重要性が今日もなお帰せられるか、つまりこの学説がなほどの程度まで現代の社会構造の理解に寄与しうるかを吟味することである。」⁽¹⁾

かようにT・ガイガーにとっては、「マルクス主義的説明における階級社会学説」は現代社会の構造分析にどの程度の有効性をもっているかということが直接の問題なのであり、かつ、こうした問題意識のもとに、彼はマルクスの名著『資本論』をとりあげて、それに批判をくわえるのである。そしてその場合、ガイガーが彼独自の見地から、つまり大衆社会論的な見地から現代社会の実状と諸特徴を示そうと試みていることはいうまでもない。^{**}それゆえ、T・ガイガーの『資本論』批判を根本的に検討するには、当然、現代社会の実状と諸特徴にかん

する彼の見解をも問題にしなければならぬが、本稿では課題をつぎの諸点の検討に限ろうとおもう。すなわち、T・ガイガーは『資本論』にたいしてどんな理由で、どのような批判をくわえているか、そしてそれらの批判はどの程度まで正当性を有するものであるか、といった諸点がこれである。別言すればわれわれは、ガイガーが『資本論』にむかつて批判の矢を放っているかぎり、その批判の矢が果して正確的に射ているかどうかを、たしかめようとするわけである。だがこの課題の遂行は、同時に、現代社会の構造にかんするT・ガイガーの分

析がどのような視角から、どんな方法にもとづいてなされているかを、ある程度示唆するであろう。

* 『あたらしい階級社会』という訳書名は鈴木幸寿氏のものであるが、原書名——*Die Klassengesellschaft im Schmelztiegel* は、字義どおりには『熔融鍋のなかの階級社会』とでも訳すべきものであろう。そして著者ガイガーは「あたらしい階級社会」の到来を説こうとしているのではなく、むしろ「階級社会」の「熔融」と消滅を（いわゆる大衆社会論の立場から）論証しようとしておているのであるから、この書物の書名は字義どおりに訳す方が適當だとも思われるが、本稿では鈴木幸寿氏の訳書名——『あたらしい階級社会』をそのまま採用しておくことにする。ただし、この書物からの引用文については、かならずしも鈴木氏の訳語にしたがっていない。

** ちなみに、ここで『あたらしい階級社会』の目次を示しておけば、つぎのごとくである。

第一章 マルクス主義の階級社会学説

第二章 階級概念の背後にある認識意図

第三章 マルクス主義の階級社会学説への根拠なき批難

第四章 いわゆる貧困化理論

第五章 階級層化は拡大するだろうか

第六章 階級関心と階級意識

第七章 福音伝導者マルクス

第八章 社会的階層化の動学

第九章 あたらしい線

第一節 中間階層

第二節 階級構造と所得

第三節 都市と農村

第四節 階級対立の制度化

第五節 経営者革命

これらの諸章のうち、現代社会の相貌についての叙述がとくに多くふくまれていているのは、第五章「階級層化は拡大するだろうか」、第八章「社会的階層化の動学」および第九章「あたらしい線」においてである。

なお、みぎの目次を一見して知られるように、『あたらしい階級社会』の著者はマルクスの「貧困化理論」(die sogenannte Verelendungstheorie)にたいしても批判をくわだてているが、ガイガーの「貧困化理論」批判は文字どおり誤解と独断にみちており(たとえば彼は、マルクスがあれほどよく論難したところのF・ラッサールの賃金鉄則説を、マルクスその人の説だと思なしている!)、⁽²⁾ 経済学の見地からとりあげるにはあまりにも粗末なものであるから、本稿ではこれをほとんど問題にしない。

ところで、『資本論』にたいするT・ガイガーの批判は、すくなくとも筆者の知るかぎりでは、大衆社会論の立場からする『資本論』批判のうちでもっとも詳細な、かつもっとも系統的なものであり、そしてそれは、その後の大衆社会論者たち(もちろん、わが国における最近の大衆社会論者たちをもふくむ)によって暗黙のうちに承認されている。だから以下の論稿は、ごく限られた意味においてではあるが、大衆社会論一般によるマルクス主義批判にたいしても一つの間接的な反批判をなすであろう。

(1) T. Geiger, Die Klassengesellschaft im Schmelzriegel, Kiepenhauer, 1949, S. 10. 鈴木幸寿訳『あたらしい階級社会』誠信書房、ニムズ。

(2) Vgl. T. Geiger, ebenda, S. 131. 前掲書「一三三ニムズ参照」。

二 『資本論』にたいするT・ガイガーの批判——その一

ことの順序として、われわれはまず、『資本論』についてガイガー自身の語るところを聞くことにしよう。彼は、マルクスには社会階級論の体系的な敘述がないとしながら、つぎのようにいつている。——「マルクス自身が社会階級について述べていることは、残念ながら断片にすぎないのであり、また散漫な覚書程度のものであり、不明確さと自己矛盾とが充満している。……マルクスの社会階級論にはどこにも体系的関連のある敘述がなかった。彼が体系的に関連させて書いた唯一のものである『資本論』第三卷第二分冊第五二章は、まさにたんなるとりあつかい、すなわち印刷された断片が残っているにすぎない。」

ここでT・ガイガーが言及している『資本論』第三卷第五二章は、「諸階級」(Die Klassen)という標題を附せられているところの、『資本論』の最終章である。そしてガイガーによると、この『資本論』最終章は、社会階級について「彼〔マルクス〕が体系的に関連させて書いた唯一のもの」であり、しかもこの章は「たんなるとりあつかい」(ein bloßer Anlauf)あるいは「印刷された断片」(ein Fragment von einer Druckseite)にすぎないのである。

ところで、周知のように『資本論』は、その第一巻だけがマルクス自身の手で刊行されたのであって、その第二巻および第三巻は、マルクスの死後、彼の老大な——だが未整理の——草稿にもとづいてF・エンゲルスが編集・刊行したものである。そしてエンゲルスは、自分の編集上の仕事を非常に控え目な態度で、すなわち「それ『資本論』の第二巻および第三巻」が一方ではまとまりのある、かつできるだけ完結せる著作となるように、だ

が他方ではまた編者の著作でなく、もっぱら著者の著作となるように「おこなったのであるから、『資本論』の第二巻および第三巻は多かれ少かれ未完成な性格をおびざるをえなかった。このことは、もちろん第三巻の最終章についても云いうる場所であつて、げんにこの章は、エンゲルスが指摘しているように、地代、利潤および賃金という三大所得形態に照応する三大階級（すなわち地主階級・資本家階級・労働者階級）と、その存在にもなつて必然的に生ずる階級闘争とが叙述されるはずであつたにもかかわらず、実際には、ただ冒頭の部分があるだけである。だからわれわれは、ガイガーが『資本論』第三巻の最終章を「たんなんとりあつかい」あるいは「印刷された断片」と呼んでいること自体については、あえて異論をとなえようとはおもわない。

しかし、T・ガイガーのいうように、『資本論』の最終章はマルクスが社会階級について叙述した唯一のものであろうか。また、この章が未完のままに終つていふ理由からして、「マルクス自身が社会階級について述べていること」は「散漫な覚書程度のもの」にすぎないとか、「マルクスの社会階級論にはどこにも体系的関連のある叙述がなかった」とか主張するのは、はたして当を得ていふであらうか。

なるほど『資本論』全三巻の諸章のうち、「諸階級」という標題を附せられているのは第三巻の最終章だけである。だが、もともと『資本論』は資本制生産様式、とりわけ資本主義的生産諸関係 \parallel 階級諸関係を対象として、この一定の歴史的に規定された生産様式の経済諸法則を究明しようとするものである。マルクス自身、『資本論』の研究対象を規定して、「私がこの著作で研究しなければならないものは資本制生産様式、およびこれに照応する生産 \parallel ならびに交易諸関係である」〔力点⁽⁴⁾・マルクス〕といい、また『資本論』の基本的任務を指摘しながら、「近代的社会の経済的運動法則を暴露することは本書の最後の窮極目的である」〔力点⁽⁵⁾・マルク

ス」と述べている。しかるに、商品生産が支配的・一般的におこなわれる資本主義社会では、奴隷制社会や封建制社会といった他の社会形態の場合とはちがって、生産における人と人との社会的諸関係がそのままの形ではあらわれずに、かならず物象化され神祕化されてあらわれる。つまり、この社会では人間と人間との社会的生産諸関係が物的外被をまとうて現象し、かつ物と物との諸関係としてあらわれる。だから『資本論』の著者は、その主要な任務——資本制生産様式の経済的運動法則を暴露するという任務をはたすためには、ブルジョア社会における物と物との諸関係の背後に人間と人間との、あるいは階級と階級との諸関係をみつけたし、物的外被に蔽われた諸関係の社会的・階級的な本質を把握しなければならなかった。そして事実マルクスは、商品・貨幣・資本等々の物神的性格を説明することによって、ブルジョア的生産諸関係⇓階級諸関係にかんする科学的理論（価値論、剰余価値論、賃金論、資本蓄積論、再生産論、等々）をうちたて、かつ、それを『資本論』において体系的に敘述したのであった。したがって、『資本論』はたんに最終章だけでなく、その全巻がブルジョアの階級諸関係についての体系的な敘述だといわなければならない。^{***}

* ここでわれわれは価値論をも、ブルジョアの生産諸関係にかんする科学的理論と見なしているが、この点については、あるいは反論があるかも知れない。というのは、価値論の対象をなす商品は、資本の生産物としての「資本制商品」ではなくて、資本関係の捨象された「単純な商品」であり、したがってまた、この商品は資本家と賃労働者とのあいだの階級関係（ないし搾取関係）をあらわすものではないからである。しかし、価値論でとりあつかわれる商品は、資本主義以前の諸社会で存在していたところの、いわゆる「歴史上の単純商品」ではなくて、どこまでも資本制社会の商品であり、ブルジョアの富の「原基形態」あるいは「細胞形態」としての商品である。かかるものとしての「単純な商品」をとりあつかいながら、

それに対象化され物質化されている社会的生産諸関係（これはもつとも抽象的な、かつもつとも一般的なブルジョアの生産諸関係である）を分析すること、こうしてブルジョア社会の内部構造の解明のための基礎理論を提供すること——ここに価値論の主要な課題がある。そしてそうであるかぎり、価値論をもブルジョアの生産諸関係にかんする科学的理論と見なすことは、あながち不当ではないといえよう。

* 『資本論』全巻がブルジョアの階級諸関係についての体系的な敘述だというこの点は、げんみつに弁証法的な見地からなされている『資本論』の篇別構成（目次）を一見しただけでも明らかであるが、念のために、この点にかんするマルクス自身の言葉を引用しておこう。一八六五年七月三一日付エンゲルス宛の手紙のなかで、彼はこういつている。「……僕は、『資本論』の」全体ができあがらないうちにどれかを送り出してしまふ決心がつかない。どんな欠陥があるうとも、僕の著作の長所は、それが一つの芸術的全体をなしているということだ。そしてこのことは、それが全部できあがらないうちはけつして印刷させないという僕のやり方でしか達成できないことだ。」「力点——マルクス、ゴシツク——引用者」

なおまたエンゲルスは、一八九二年九月一二日付シュミット宛の手紙のなかで、つぎのように書いている。——「利潤率にかんする篇を特別に先に刷らせることは絶対にできません。あなたの知られるように、マルクスにあつてはいつさいが緊密に連結されていて、関連からひきはなすことのできるものはありません。」「⁽⁶⁾
⁽⁷⁾

『資本論』を問題にしなから、しかも「マルクスの社会階級論にはどこにも体系的関連のある敘述がなかった」などということができるのは、『資本論』を読んではいるが、それをいささかも理解していないものだけであるう。くりかえしていえば、『資本論』は第一章から最終章にいたるその全巻が、ブルジョアの階級諸関係にかんする「体系的関連のある敘述」なのである。

とはいえテオドル・ガイガーが、『資本論』第三巻の最終章はマルクスが社会階級について体系的に敘述し

た唯一のものだと考えるにいたつたについては、なんの理由もないわけではない。ひとも知るように、『資本論』は史的唯物論を方法論上の基礎として書かれたものであり、したがってここでは、諸人格や諸階級はただ経済的諸範疇の「人格化」(Personifikation)あるいは「担い手」(Träger)としてのみ問題にされている。マルクス自身、この点を指摘しながら『資本論』初版への序言のなかで、つぎのように述べている。——「おこりうべきもろもろの誤解をさけるために一言する。私はけつして、資本家や土地所有者の姿態の光明面をえがいてはいない。しかし、ここで諸人格が問題となるのは、ただ彼らが経済的諸範疇の人格化であり、一定の階級諸関係および利害関係の担い手であるかぎりにおいてである。経済的な社会構造の発展を一つの自然史的過程と解する私の立場は、他のどの立場よりも、個人をして諸関係——すなわち、いかに彼が主観的にはそれを超越しようとも、社会的には彼がその被造物たるにとどまる諸関係の、責任者たらしめることはできないのである。」〔力点——マルクス〕かくて『資本論』においては資本家は資本の「担い手」としてのみ問題にされ、賃労働者は賃労働の「人格化」としてのみとりあつかわれる、等々。しかも『資本論』の著者は、その研究対象たる資本制生産様式そのものの独自性のために、ブルジョア的生産諸関係—階級諸関係を直接にとりあげるわけにはゆかず、いわば廻り道をしながら、物象化され神祕化された側面からそれを分析しなければならなかった。そのため『資本論』にあつては、商品・貨幣・剰余価値・賃金などといった諸範疇の理論的展開が全面的になされたのちに、最終章にいたつてはじめて諸階級が直接の論題としてとりあげられている。そしてこうした事情がT・ガイガーをして、『資本論』の最終章はマルクスが社会階級について体系的に敘述した唯一のものだと主張させることとなつたのであらう。

しかしこれはとりもなおさず、『資本論』の方法と内容とにたいするT・ガイガーの完全な無理解を物語るものにほかならない。というのは、もしガイガーが、『資本論』に適用されている科学的方法と、そこで展開されている経済理論とを多少とも正確に理解していたならば、彼は同時につきの点をも、すなわちマルクスにおいては経済的諸範疇がいづれも一定の歴史的に規定された生産諸関係の表現として擱まれており、だからまた、『資本論』におけるこれらの範疇の理論的展開は實際上、ブルジョア的生産諸関係―階級諸関係の分析以外のなにもでもないという点をも、とらえていただらうからである。

さて、『資本論』にたいするテオドール・ガイガーの批判は、もちろん、さきに引用した一文をもって終るわけではない。たとえば彼はつぎのようにいつている。――「資本主義社会の構造にかんして描いたマルクスの像は、かなり一義的に都市的・産業的社会に方向づけられていて、農村社会はこれを無視している。……一八世紀末期の産業主義(Industrialismus)の発生と並行して、封建的農業体制の最後の残滓が崩壊した。それまで領主や地主に経済的に依存していた農民は終局的に解放され、そしてそのことによって自己の農場をもつ独立者になった。だからわれわれは、都市的経営をしている零細独立者がプロレタリア化したという主張を再検討するまえに、つぎのことをつよく確立しなければならない。すなわち、まさに産業主義の開始の時代には、生産手段を自己の計算にしたがって処理し、かつそれによって労働する独立的農民の広汎な階層が発生したということ、これである。」〔力点――ガイガー〕

ガイガーはまた、こうも書いている。――「マルクスによって描かれた階級社会は産業主義とむすびついており、そしてこの産業主義は都市的社会的現象である。われわれはすでにまえに、都市的・産業的社会へのマルク

スの一面的な顧慮に反対する機会をもった。農村ではまったく別の諸関係が支配していた。……農村では、同時的な農民解放が小独立者の中間階層を形成した。……当時の農村社会の構造は、まさに強制された分析によってのみ、社会にかんするマルクスの全体像のなかへ組み入れられたのである。⁽¹⁰⁾

みぎの二つの文章においてT・ガイガーは、一八世紀末期の農村では「同時的な農民解放が小独立者の中間階層を形成した」こと、「産業主義」あるいは産業革命がはじまろうとする時代には、「独立的農民の広汎な階層」(eine breite Schicht selbständiger Bauern)が発生したことを強調しているが、これは史実に反する無造作な立言であつて、すくなくともイギリスについてはあてはまらない。なぜならイギリスの農村では、「生産手段を自己の計算にしたがつて処理し、かつそれによつて労働する」ところの「独立的農民」、つまり独立自営農民の階層は、第一次と第二次との二回にわたるエンクロージャー・ムーヴメントの過程で一八世紀末期にはすでにほとんど完全に消滅していたからである。

それはともかく、物理学者や化学者といった自然科学者たちは、自然の諸過程を研究するにあつて、もし可能ならば、過程の純粹な経過を保障するような諸条件のもとで実験をおこなうが、これが不可能な場合には、自然の諸過程が、つとも含蓄ある形態であらわれるところで、つまり、それらが攪乱的な影響のためにかきみだされないで現象するところで観察をおこなう。けだし、そうすることによつてはじめて、彼らは自然の諸法則を純粹な形で把握することができるからである。ところで、すでに見たように、『資本論』の研究対象は「資本制生産様式、およびこれに照応する生産」ならびに交易諸関係である。そしてマルクスが『資本論』を執筆していたころ(一八五〇—一六〇年代)に、それらがつとも含蓄ある形態で、もつとも典型的な形態で現存していた場

所はイギリスであった。⁽¹¹⁾ ここでは資本制生産様式がたんに工業において確立してただけでなく、農業においても、いわゆる「三分制度」(tripartite system)の成立によって十分に自己を確立していた。そこでマルクスは、近代ブルジョア社会の経済的運動法則を探究するにあたって、一八五〇—一八六〇年代の——ガイガーが考えているように一八世紀末期のではない——イギリス資本主義の具体的現実を分析の対象としたのであった。^{*}

* この点は、『資本論』第一卷(一八六七年)第七篇におけるマルクスのつぎの一文からも知られるところである。——「近代的社会を通じて最近の二〇年間ほど資本制蓄積の研究にとつて好都合な期間はない。この期間は、あたかもフォルトウナトゥスの財布をみいだしたかのようである。しかも、すべての国のうちでイギリスはまたしても典型的な実例(Tas klassische Beispiel)を提供する。けだしイギリスは世界市場で王座を占めており、資本制生産様式はひとりこの国でのみ十分に發展しており、そして最後に、一八四六年以来の自由貿易という至福一千年王国の開始が俗流経済学の最後の逃げ場を遮断したからである。」⁽¹²⁾

しかしながら、当時のイギリスにおいても資本制生産様式が文字どおり純粋な形で存在していたわけではなかった。一般に純粋資本主義社会なるものは現実には存在しうるはずがなく、したがって、そのころのイギリスにおいても過去の前期的諸関係が多かれ少かれ残っており、それらが資本制生産様式と複雑にからみあっていたのである。かくてマルクスは、その経済学的研究をおこなうにあたっては、自己の強靱な抽象力にたよりながら、こうした攪乱的諸要素をすべて捨象しなければならなかった。^{*} というのは、そうすることなしにはマルクスは、近代ブルジョア社会の内的編成と経済諸法則とを純粋な形で闡明することができなかったからである。

* ここでわれわれはマルクスのつぎの言葉を想起すべきである。——「経済的諸形態の分析にさいしては顕微鏡も科学的試薬も役に立ちえない。抽象力(Abstraktionskraft)が両者にとつてかわらねばならない。」⁽¹³⁾

かくして『資本論』においては、資本制生産様式の諸条件——資本の自由な競争、農業をもふくむ生産部門での資本関係の確立、ある生産部門から他の生産部門への資本の移転可能性など——が完全に成熟している社会つまり資本制生産様式が専一的・支配的におこなわれる社会が想定されており、だからまた、すべての人口が資本家、賃労働者および土地所有者に完全に分裂しているような社会が想定されている。^{*}そして『資本論』の著者は、かような社会を想定しながら、諸階級の基礎をなす経済的諸範疇——資本、賃労働、近代的地所有、等々——を理論的に説明しているのである。したがってテオドル・ガイガーが、一八世紀末期の農村には「独立的農民の広汎な階層」が存在していたと主張しながら、「資本主義社会の構造にかんじて描いたマルクスの像は、かなり一義的に都市的・産業的社会に方向づけられていて、農村社会はこれを無視している」とか、「当時の農村社会の構造は、まさに強制された分析〔！〕によってのみ、社会にかんするマルクスの全体像のなかへ組み入れられたのである」とかいうとすれば、これはただ、『資本論』で採用されている科学的な手続きと、そこに敘述されている農業理論¹⁴とにたいする彼ガイガーの理解の程度を示すだけのものであろう。^{**}

* かかる理論的操作は、イギリス古典経済学の最良の代表者たるダヴィッド・リカアドウによっても、その著『経済学および課税の原理』のなかで適用されている。なお、この点については拙稿『価値論および分配論におけるアダム・スミスとリカアドウ（下）』（本誌第六卷第二号、五〇—五一ページ）を参照されたい。

** 同様のことは、T・ガイガーのつぎの諸章句についてもいいうるところであらう。

「カール・マルクスはその階級社会学説によつて、都市的・産業的社会のもつ構造の一定の特徴を適切に敘述した。このように条件つきで考えても、彼が当時の社会についてあたえた像はある程度ゆきすぎである。産業社会においては階級の画線は、彼が描いたほどはつきりとはひかれていない。」¹⁴

「資本家と賃労働者とのあいだの生産関係、およびこれに対応する階級軌轍は、マルクス主義流にいえば、資本主義的・産業的社會の特色を示すものであり、そしてその将来を規定している。

「周知のようにわれわれは、社會構造のこのような分析にたいして異論を述べた。すなわち、事実を不当に単純化し、社會の全体像における個別的特徴を、その根底に横わる構造原理にまで拡張させるものである、と」⁽¹⁵⁾

これらの章句においてT・ガイガーが念頭に置いているのは、「資本主義的・産業的社會」にはブルジョアジーとプロレタリアートのほかに、なお「中間階層」(Mittelschicht)もまた存在するという点である。しかし、本文で述べたように、科学的經濟理論の展開のためには、資本制生産様式の支配的におこなわれる社會が前提されねばならないのであり、したがって、いわゆる「中間階層」の存在はこれをさしあたり度外視しなければならぬのである。T・ガイガーは、『資本論』で適用されているこうした理論的手続きを正しく理解していなかったからこそ、マルクスを批難して、「産業社會においては階級の画線は、彼が描いたほどはつきりとはひかれていない」などといったのである。

しかしながら、テオドル・ガイガーが、『資本論』を批判しながら、そこでは「都市的・産業的社會」(die städtisch-industrielle Gesellschaft)が一面的に重視されていて、他方、「農村社會」(die Agrargesellschaft)が不当に軽視されていると主張するにいたつたについては、つぎのことを考慮に入れる必要がある。すなわち、『資本論』では近代的農業が第三卷第六篇「超過利潤の地代への転形」(これは最後から二番目の篇である)においてはじめとりあげられており、それ以前の諸篇(これらは『資本論』全三卷の大部分をなしている)では事實上、土地所有や地代の存在が捨象されているということ、これである。実際、このことは、マルクスが「農村社會」を不当に軽視していた証拠であるかのように思われる。なぜなら土地所有や地代は、あらゆる生産の源泉たる土地とむすびついているだけでなく、歴史的にも資本に先立つて発生しており、したがって、經濟学の敘述はこれら

の概念からは始めるのが当然だと思われるからである。だが、科学的経済学の見地からみてこれほどまちがったことはないのである。マルクスが『経済学批判序説』のなかで指摘しているように、⁽¹⁶⁾すべての社会形態には「一つの普遍的照明」(eine allgemeine Beleuchtung)と見なされるべき或る一定の生産があつて、その生産が他のすべての生産に順位と影響とをあたえるものである。そしてブルジョア社会では、いっさいを支配する経済力は資本である。ここでは農業は、まったく資本によつて支配される一産業部門となつており、したがつて土地所有は近代的・資本主義的土地所有として、また地代は資本制地代としてあらわれる。そしてそのかぎり、地代や土地所有は資本を理解しないでは理解できないが、これに反し資本は、地代や土地所有を理解しなくても十分理解される。かくして科学的経済学は、もろもろの経済的範疇を、それらの歴史的発展の順序にしたがつてではなく、それらがブルジョア社会で相互にたいしてもつ関係にしたがつて敘述しなければならぬ。そこでマルクスは、地代にかんする敘述を『資本論』の第三卷第六篇に位置せしめ、かつ、それ以前の諸篇ではもつぱら資本関係の分析に力を注いだのであつた。

ところが、かような事情はT・ガイガーには少しも解らないのであつて、そのために彼は、あたかも「農村社会」と「都市的・産業的社会」とが相互に自立的に存在しうるかのように考えながら、「資本主義社会の構造にかんして描いたマルクスの像は、かなり一義的に都市的・産業的社会に方向づけられていて、農村社会はこれを無視している」、等々と主張するにいたつたのである。しかし、『資本論』では地代や土地所有がいわば第二次的なとりあつかいをうけているとしても、これは、マルクスが「農村社会」を不当に軽視していたことによるのではなくて、近代ブルジョア社会の内部におけるそれらの範疇の比重そのものに――あるいはより正確には、その

軽さに——起因しているのである。^{* *}

* マルクスにたいするこの種の批判は、『あたらしい階級社会』のなかでT・ガイガーがしばしばおこなっているものであって、たとえば彼はつぎのようにも書いている。——「全体社会の構図としては彼（マルクス）の階級理論は完全に片手落ちであった。彼は当時の農村社会がまったく別な構造をもっていたことを顧慮しなかった。」⁽¹⁷⁾

* * 資本主義社会の内部における土地所有の比重の軽さは、急進的ブルジョアが歴史上いくたびか土地国有化の要求をかかげてあらわれたという点にも看取しうるのであるが、この間の事情についてはヴェ・イ・レーニンをつぎの指摘を参照すべきであろう。——「差額地代は、資本主義が存在するところでは廃止できないが、他方、絶対地代は、たとえば土地を国有化すれば、つまり土地を国家の所有に移せば、廃止できるのである。このような「土地の国家への」引渡しは、私的所有者の独占をくつがえすことを意味し、農業における競争の自由がいつそう徹底的に、いつそう完全に実行されることを意味するのである。またこのような理由からして、マルクスがみとめているように、急進的ブルジョアは歴史上たびたび土地の国有化というこの進歩的なブルジョアの要求をもって登場したのであるが、しかしこの要求はブルジョアジーの大多数をおびえさせる。なぜなら、それはもう一つの独占、現代においてとくに重要で『敏感な』独占、すなわち生産手段一般の独占にあまりにも『肉迫する』からである。」⁽¹⁸⁾「力点——レーニン」

(1) T. Geiger, Die Klassengesellschaft, SS. 10-11. 鈴木訳、三ノムツ。

(2) Vgl. K. Marx, Das Kapital, Volksausg. bsgt. v. M-E-I-Institut, Berlin, 1955, Bd. II, S. 3. 長谷部文雄訳『資本論』日本評論社、第五分冊、一一一ページ参照。

(3) Vgl. K. Marx, ebenda, 1956, Bd. III, SS. 8-9. 長谷部訳、第八分冊、三〇三ページ参照。

(4) K. Marx, ebenda, 1955, Bd. I, S. 6. 長谷部訳、第一分冊、一一三ページ。

(5) K. Marx, ebenda, SS. 7-8. 長谷部訳、第一分冊、一一六ページ。

- (9) K. Marx, Briefe über „Das Kapital“, bsgt. v. M-F-I-Institut beim ZK der SED, Berlin, 1954, S. 127. 岡崎次郎訳『資本論に関する手紙』、法政大学出版局、上巻、一四〇ページ。
- (7) F. Engels, ebenda, S. 351. 岡崎次郎訳、下巻、四〇五—四〇六ページ。
- (8) K. Marx, Das Kapital, Bd. I, S. 8. 長谷部訳、第一分冊、一一六—一二七ページ。
- (9) T. Geiger, Die Klassengesellschaft, SS. 89-90. 鈴木訳、八八—八九ページ。
- (10) T. Geiger, ebenda, S. 177. 前掲書、一七九—一八〇ページ。
- (11) Vgl. K. Marx, Das Kapital, Bd. I, S. 6. 長谷部訳、第二分冊、一一三ページ参照。
- (12) K. Marx, ebenda, SS. 683-684. 長谷部訳、第四分冊、一七三—一七四ページ。
- (13) K. Marx, ebenda, S. 6. 長谷部訳、第一分冊、一一二ページ。
- (14) T. Geiger, Die Klassengesellschaft, S. 137. 鈴木訳、一三九ページ。
- (15) T. Geiger, ebenda, S. 41. 前掲書、三六ページ。
- (16) Vgl. K. Marx, Zur Kritik der politischen Ökonomie, Volksausg. bsgt. v. M-F-I-Institut, Berlin, 1951, SS. 263-265. 宇高基輔訳『経済学批判』、日本評論社、三五六—三五九ページ参照。
- (17) T. Geiger, Die Klassengesellschaft, S. 137. 鈴木訳、一三九ページ。
- (18) В. И. Ленин, Сочинения, Издание четвертое, том 21, стр. 51. 『レーニン全集』、大月書店、第二一巻、五五—五六ページ。

三 『資本論』にたいするT・ガイガーの批判——その二

前節で見たように、『資本論』においては、資本制生産様式が支配的・専一的におこなわれる社会、全人口が

資本家階級、労働者階級および地主階級に完全に分裂しているような社会が前提されているのであるが、『資本論』がこのような社会を前提している以上、そこで展開される理論は当然、一定の抽象的な性格をおびざるをえない。というのは、すでに一言したように、総じて純粹資本主義社会なるものは現実には存在しえないからである。かくてわれわれはつぎのようにならなければならない。——『資本論』に敘述されている経済理論は階級理論は、イギリス、フランス、ドイツといった特定の資本主義国の具体的な階級諸関係を分析したのではなく、資本制生産様式あるいはブルジョアの階級諸関係一般にかんする抽象的な理論である*。と。たしかにマルクスは、『資本論』を著述するにあたって、とりわけイギリス資本主義社会の現実を分析したのではあったが、しかしそれは当時のイギリスが理論的展開のための「典型的な実例」(das klassische Beispiel)を提供したからであり、またそのかぎりにおいてであった。

* この点はマルクスが一度ならず指摘したところであって、たとえば『資本論』初版への序言のなかにはつぎのような文章がみいだされる。——「資本制生産のもろもろの自然法則から生ずるところの、社会的なもろもろの敵対の発展程度の高低は絶対的の問題ではない。問題なのは、これらの法則そのものであり、頑強な必然性をもって作用し、かつ自己を貫徹しつつあるこれらの諸傾向である。産業的により発展せる国は、発展のおくれた国にたいし、ほかならぬそれ自身の将来の姿を示すのである。」〔力点——マルクス〕

『資本論』で展開されている理論が抽象的性格をおびているというこの点は、ヴェ・イ・レーニンもしばしば強調したところであって、たとえば彼はロシアの人民主義者ストルーヴェを批判しながら、つぎのように述べている。

「もし『完全な実現は資本主義的生産の理想ではあるが、けっしてその現実ではない』という事情がストルーヴェを当惑させるといふなら、われわれは、マルクスによつて発見された資本主義の他のすべての法則もまた、まったく同様に、ただ

資本主義の理想をえがいているだけで、けっしてその現実をえがいていっているのではないということを、彼に思いだしてもらおう。マルクスはこう書いている。——『われわれはただ、資本制生産様式の内部組織をいわばその理想的平均において（*in ihrem idealen Durchschnitt*）のみ敘述すべきである。』資本の理論は、労働者が自分の労働力の完全な価値をうけとるということをも想定している。これは資本主義の理想ではあるが、けっしてその現実ではない。地代の理論は、すべての農業人口が地主と資本家と賃労働者とに完全に分裂したということをも想定している。これは資本主義の理想ではあるが、けっして現実ではない。実現の理論は、生産の均衡的配分を想定している。これは資本主義の理想ではあるが、けっしてその現実ではないのである。⁽²⁾』

かように、『資本論』で展開されている経済理論＝階級理論は一定の抽象的な性格をおびているのであるが、これはこの階級理論の欠陥ではなくして、むしろその大きな長所である。というのは、あれこれの資本主義国の具体的な経済状態あるいは階級諸関係は、資本制生産様式一般にかんする抽象的理論があたえられているときにはじめて、十分な科学性をもつて分析されるのだからである。そしてここにこそ、『資本論』における階級理論の絶大な科学的意義が存しているのである。

しかるにテオドル・ガイガーは、こうした点をすこしも理解していないのであって、だからこそ彼は、たとえば、マルクスの「貧困化理論」に批判をくわえるにさいして、この理論が抽象的な性格をおびているという理由からして、「それは現実の資本主義にはなく、資本主義にかんするマルクスのイデーにおいてのみ存するものである」とか、「貧困化理論は、⁽³⁾一つの宗教的伝説（*eine Legende*）である」、「⁽⁴⁾力点（ガイガー）などと断定することができたのである。^{*} もちろん実際には、マルクスの「貧困化理論」、より正確には「資本制蓄積の一般的法則」

(das allgemeine Gesetz der kapitalistischen Akkumulation) 及び『資本論』で解明されている他のすべての法則と同様、その実現にさいしては多様な歴史的諸事情によつて変更されるとはいえ、総じて資本制生産様式が存在するかぎり、どの国においても現実には、かつ頑強な必然性をもつて作用するものである。

* T・ガイガーの「貧困化理論」批判が独断と誤解にみちていることについてはすでに指摘しておいたが、マルクスの「貧困化理論」にたいする批判には大衆社会論の見地からするもののほかに、ベルンシュタインをはじめとする社会民主主義者たちの側からなされた批判がある。また最近、わが国——およびフランス、ドイツ、イギリスなど——の経済学界では、いわゆる「絶対的窮乏化法則」をめぐつて広汎な論争がくりひろげられている（マルクス自身は「資本制蓄積の一般法則」を問題にしたのであつて、「絶対的窮乏化法則」なるものについては語っていないのだが）。しかし、この論争の経緯と問題を立ち入つて検討することは本稿の当面の課題ではないので、ここでは、「資本制蓄積の一般法則」にかんするマルクス自身のつぎの定式を引用しておくにとどめる。

「社会の富、機能しつゝある資本、その増加の範囲および精力が、したがつてまたプロレタリアートの絶対量および彼らの労働の生産力が大となればなるほど、それだけますます産業予備軍が大となる。自由にしうる労働力は、資本の膨脹力の場合と同じ諸原因によつて発展させられる。かくて産業予備軍の相対量は、富の諸力能につれて増加する。だが、この予備軍が現役労働者軍に比較して大きくなればなるほど、固定的な過剰人口、または、その労働者に反比例して窮乏せる労働者層がますます大量的となる。最後に、労働者階級中の窮乏層と産業予備軍とが多くなればなるほど、公認の被救恤的窮民がますます多くなる。これは資本制蓄積の絶対的・一般的法則である。」〔力点およびゴシック——マルクス〕⁽⁵⁾

ところで、さきに見たように、『資本論』で展開されている階級理論は一定の抽象的・一般的な性格をおびているのであるが、このことはマルクス階級理論の実証的性格を否定するものではけつしてない。この点は、もとも

と『資本論』が一八五〇—一六〇年代のイギリス資本主義社会の現実を基礎として書かれたものであること、そしてマルクスは『資本論』のいたるところで（とくに第一卷第三篇第八章「労働日」、同第四篇第一三章「機械と大工業」、同第七篇第二三章「資本制蓄積の一般の法則」等々の諸章）できわめて豊富な事実的材料を引証していること、また彼は『資本論』の各論理段階で、理論的展開に照応する具体的・実在的なものをたえず指示していることなどの諸点を想えば、まったくおのずから明らかであろう。実際、『資本論』における階級理論は、一方では抽象的な性格をもっていると同時に、他方では、すぐれて実証的な性格をもっているのである*。

* この点は、一八六八年一〇月一〇日付エンゲルス宛の手紙におけるマルクスのつぎの一文からも、うかがい知ることができよう。——「たまたま僕はある小さな古本屋でアイルランドの借地権にかんする一八六七年の報告と証言（上院）をみつけた。これはまったく掘出しものだった。経済学者諸君が、地代は土地の自然的な差異にたいする支払であるか、それとも土地に投ぜられた資本にたいする単なる利子であるかを純粹な学説論争として論じているとき、われわれはここでは、どの程度まで、地代は、土地の差異にたいする支払のほか、に、地主によってではなく借地人によって土地に投ぜられた資本の利子をも、ふくむべきかについての、借地農と地主とのあいだの生死をかけた実際の闘争を見る。あいあらず諸学説のかわりに、あいあらず諸事実とそのかかれた背景をなす現実の諸対立とを置くことによってのみ、われわれは経済学を一つの実証的科學 (eine positive Wissenschaft) に転化することができた。」⁽⁶⁾「力点——マルクス、ゴシツク——引用者」

なおまたレーニンは、マルクスの貨幣理論の実証的性格を強調しながら、つぎのように述べている。——「マルクスは貨幣の種々の機能を非常に詳細に分析しているのであるが、その分析のところでは、抽象的な、往々にして外見的には純演繹的な敘述の形態が、実際には交換および商品生産の発展史にかんする膨大な事実的材料 (эмпирический фактический материал) を再生産しているのだということをつきとめることが、ここでも（総じて『資本論』のはじめの諸章におけると同様に）と

くに重要である。」〔力点——引用者〕

ところが T・ガイガーは、『資本論』における階級理論がこのように優れて実証的な性格をもっていることを正しく把握しえないのであつて、げんに彼はつぎのようにいつている。^{*}——「マルクスの階級理論は実は帰納的研究の成果ではなく、また社会的な諸過程および諸状態や、それらから出てきた一般的諸命題を経験的・個別的に観察して生れたものでもない。忠実なヘーゲル学徒であつたマルクスは、演繹的に事を処理し、天才的な思いつぎを基礎にして、社会認識の原理として階級概念をたて、そしてこの概念によつて社会的現実を解釈したのである。」⁽⁸⁾

* ガイガーはまた、つぎのようにも書いている。——「マルクス主義は、その概念図形によつて演繹的に研究し、しかもこの図形に永遠の妥当性をア・プリオリにあたえている。マルクス主義は社会的現実を観察せず、そしてその理論を発見された諸事実と調整せず、当時の社会像を、ただ一回かぎり通用する概念図式にとちこめようとしている。」〔力点——引用者〕

テオドル・ガイガーがかように主張するにいたつたについては、われわれはつぎの事情を考慮しなければならぬ。すなわち、マルクスにおいては敘述の仕方が研究の仕方から区別されているという事情が、それであるマルクス自身が指摘しているように、⁽¹⁰⁾ 研究は実在的・具体的なものから、したがつて「全社会的生産行為の基礎であり主体である人口」から出発して、これに分析をくわえながら、資本家や賃労働者などの諸階級へ、さらにこれらの階級から資本や賃労働へというふうに、だんだんとより簡単な、より抽象的な範疇へ近づかなければならぬ。こうしてわれわれは、最初に表象された具体的・実在的なものから次第により簡単なものへとすすんでゆき、そしてついにはもつとも簡単な範疇——商品——に到達する。つまり研究は、具体的なものから次第によ

り抽象的なもの、より簡単なものへと、下向の道をたどるのであるが、この下向のプロセスにおいては、いまでもなく、対象にかんする豊富な歴史的・事実的材料があつめられ、整理され、かつ分析されねばならない。そしてマルクスは、『資本論』の刊行に先立つ二十数年にわたる研究の過程で、じじつ、この困難な仕事をやりとげたのであつた。ところで、ちよつと考えただけでは、経済学の敘述も具体的なもの——人口——からはじめるのが正しいように思われる。だが、このやり方はより立ち入つて考察すると、あやまりであることがわかる。人口は、たとえばその構成要素たる諸階級（資本家階級や労働者階級など）を明らかにしなければ、一つの空語にすぎない。これらの階級も、その基礎をなす資本や賃労働などが知られていなければ、やはり無内容な言葉にすぎない。さらにまた資本や賃労働は、貨幣・商品・価値・価格・等々の本質が明らかにされていなければ理解できない。したがつて、経済学の敘述を一国の人口からはじめるとすれば、それは混沌たる表象からはじめることを意味するのであつて、このような敘述の仕方は学問的に正しいものとはいえない。

かくて敘述は、研究が到達するもつとも簡単な範疇——商品——から「後方への旅」をはじめて、次第により複雑なものへと、上向の道をたどらなければならない。こうしてわれわれはついにふたたび人口に到達するであろうが、こんどは混沌たる表象としての人口ではなく、「多くの諸規定と諸関係をもつ豊富な一総体」(eine reiche Totalität von vielen Bestimmungen und Beziehungen)としての人口に到達するであろう。そしてこのことはとりもなおさず、具体的・実在的なものがわれわれの頭悩のなかに再生産されたことを意味しているのである。したがつて、いわゆる上向法は具体的なものを精神上具体的なものとして再生産するための唯一の学問的な敘述の仕方だといふことができよう。そして『資本論』の敘述は、まさにこの上向法にもとづいてなされているので

ある。

かように、マルクスにあつては敘述の仕方が研究の仕方から区別されており、そして『資本論』で採用されている上向法においては、ともすれば純粹に演繹的だと見なされがちな敘述の形式が、実は大量の歴史的・事実的材料を止揚しているのであるが、この間の事情を正しく理解しない読者にとつては、あたかもマルクスはスコラ的な思弁の遊戯にふけつてゐるかのようと思われる。遺憾ながら、テオドール・ガイガーもまた、そうした読者の一人なのであつて、それゆゑにこそ彼は、マルクスの階級理論は「帰納的研究の成果」（die Frucht induktiver Forschung）ではないとか、マルクスは「天才的な思ひつき」（ein geniales Aperçu）にもとづいて演繹的に事を処理したとかいうにいたつたのである。

* マルクスはこの点に言及しながら、一八七七年一月三日付ショット宛の手紙のなかで、こう書いている。——「じつさい私は内々では『資本論』を、それが読者に提供されるのとは反対の順序（第三の歴史的な部分からはじまる）ではじめたのです。ただ、最後に着手された第一巻はただちに印刷のために仕上げられたのに、他の二つの巻は、すべての独創的な研究がもつ未完成な形態のままにとどまつたということだけは別として。」⁽¹⁾

マルクス自身は、T・ガイガーに類した皮相的な批判者の登場を予想していたのであつて、たとえば彼はつぎのようにいつている。^{*}——「もちろん敘述の仕方は、形式的には研究の仕方と区別されなければならない。研究は、材料を仔細にわがものとなし、そのさまざまな発展形態を分析し、そしてそれらの形態の内的紐帯を嗅ぎださねばならない。この仕事成就されたのちにはじめて、現実的な運動が照応的に敘述されうる。これが成功すれば、そしていま、材料の生命が観念的に反映すれば、あたかもわれわれは、先験的な構成（eine Konstruktion

a priori) にふけつて、いるもの、の、の、の、に見えるかも、知れない。」〔力点——引用者〕⁽¹²⁾

* マルクスはまた、一八六七年六月二七日付エンゲルス宛の手紙のなかでは、つぎのように書いている。——「いま僕があらゆるこの種の疑念〔価値と生産価格との関連についての〕を、ま、え、も、つ、て、刈、り、と、ろ、う、と、思、う、な、ら、ば、僕、は、弁、証、法、的、な、展、開、方、法〔つまり上向法〕の全体をだめにしてしまふだろう。反対だ。この方法のもつ長所は、たえず連中にわなをしかけて、このわなが連中の愚鈍さの時ならぬ表明を挑発することなのだ。」〔力点——マルクス〕⁽¹³⁾

実際、マルクス階級理論の実証的性格を否定するT・ガイガーは、マルクスがしかけておいた「わな」にかかつて、はかrazも自己の「愚鈍さ」を暴露したというほかはない。

さて、みぎに見たように、テオドル・ガイガーは『資本論』における階級理論の実証的な性格をみとめようとしないのであるが、ガイガーのこうした見地は、彼がつぎのように主張する場合には一段と明白になる。——

「史的唯物論はけっして経験科学的理論ではなくて、一つの形而上学的見解 (eine metaphysische Schau) である。したがって、社会階級にかんするマルクス主義的概念がこのような歴史形而上学 (Geschichtsmetaphysik) を基礎としているかぎり、それはいつさいの科学的意味を欠如している。その本質は、存在するものを認識することではなくて、信仰および将来の希望を認識することである。」⁽¹⁴⁾

『資本論』における階級理論が史的唯物論の主要な命題（たとえば、人間の生活過程全般を規定する基本的な力は物質的財貨の生産様式であるという命題、生産様式は生産力と生産関係との統一であって、ある一つの生産様式から他のより高度な生産様式への移行は生産力の発展からはじまるという命題、等々）を基礎としていること——これは事実である。マルクス自身、その『経済学批判』への序言のなかで、史的唯物論の諸命題が彼の経済

学的研究にとつて「みちびきの糸」となったことを明言している⁽¹⁵⁾。しかし史的唯物論は、ガイガーのいうように「形而上学的見解」あるいは「歴史形而上学」ではなくて、それ自体、法哲学・歴史学・経済学などの批判的考察をつうじてひきだされた「一般的結論」(das allgemeine Resultat)なのである^{*}。しかもマルクスは、この「一般的結論」をもつて満足することなく、それを検証、され、べき假説と見なしながら、イギリスその他の資本主義国の現実とブルジョア経済学の歴史とにかんする老大な材料を徹底的に研究し、かつ、この研究の成果——「長年にわたる良心的な研究の成果」(マルクス)——を『資本論』において体系的に敘述したのであった。

* この点を指摘してマルクスはつぎのように述べている。

「私をおそうた疑問の解決のためにくわだてた最初の仕事はヘーゲル法哲学の批判的再検討であつて、その序説は、一八四四年にパリで発行された『独仏年誌』に掲載された。私の研究はつぎのような結果に到達した。すなわち、法律諸関係ならびに国家諸形態なるものは、それ自体によつても、またいわゆる人間精神の一般的発展によつても理解されうるものではなく、むしろそれらは、物質的な生活諸関係——これらの総体をヘーゲルは一八世紀のイギリス人とフランス人の先例にならつて『市民社会』という名称のもとに総括している——に根ざしているということ、だがこの市民社会の解剖は、これを経済学のうちにもとめるべきであるということであつた。私は経済学の研究をパリではじめたのであるが、キゾー氏の追放命令の結果、私はブリュッセルに移つたので、さらにこの地でこれを継続した。私のえたところの、そしてひとつたび自分のものとなつたのちは私の研究にとつてみちびきの糸となつたところの一般的結論は、簡単につきのよう⁽¹⁷⁾に定式化することができる。……」〔力点——引用者〕

* * この点については、ヴェー・イ・レーニンのつぎの指摘がある。——「マルクスは一八四〇年代にこの仮説〔史的唯物論〕を確立したのち、材料の事實的（よく、注意せよ）研究にとりかかった。彼は一つの経済的社会構成体——商品経済制度——

をとりあげ、甚大な資料（これを彼は二五年以上も研究したのだ）にもとづいて、この構成体の機能とその発展の諸法則に
かんするきわめて詳細な分析をあたえた。」〔力点——レーニン〕⁽¹⁸⁾

なおエルゲルスは、彼およびマルクスの学問的態度を特徴づけながら、なかんづくつぎのように述べている。——「唯物
論的把握をただ一つの歴史的事例について展開することだけでも、数年にわたる静かな研究を必要としたであろう科学的な
仕事であった。というのは、この場合にはたんなる言葉だけではなんの役にもたないということ、批判的に検討され完全
にわがものとされた大量の歴史的材料だけがこのような課題を解決することができるということは明らかだからである。」⁽¹⁹⁾

したがって、『資本論』が史的唯物論を方法論上の基礎としているという事実は、そこに展開されている階級
理論が思弁的・先験的な性格のものであることを意味するわけではけつしてない。否むしろ、ヴェ・イ・レーニ
ンが指摘しているように、⁽²⁰⁾『資本論』の出現は史的唯物論そのものに、「もつとも深遠な、もつとも包括的な、か
つ細目にまでわたる確証」をあたえたのであり、そしてこのとき以来、史的唯物論はたんなる仮説から「科学的
に立証された命題」〔научно доказанное положение〕にまで高められたのである。

* 『労働価値論史研究』の著者、ロンド・L・ミークのつぎの見解は正鵠をえたものといえよう。——「マルクスが唯物
史観を、ある固定した先験的な図式として、それに経済的諸事実がいやがおうでも一致させられねばならないものとして考
えていたと想像するのは、たいへんなあやまりである。むしろ彼はそれを、経済的諸事実に適用することによって検証さ
れねばならない仮説と考えていたのである。したがって、彼の種々の経済学的著作——とりわけ『経済学批判』と『資本論』
——は、このながい骨の折れる検証過程の諸段階と考えるのがもつとも妥当であろう。」⁽²¹⁾

それにもかかわらず、テオドル・ガイガーがマルクスを批判して、「史的唯物論はけつして経験科学的理論
ではなくて、形而上学的見解である」とか、マルクスの階級理論が史的唯物論を基礎としている以上、「それは

いっさいの科学的意味を欠如している」とか主張するとすれば、これはただ、ガイガーが史的唯物論および『資本論』の科学的意義を正当に評価していないこと、そして彼自身は語の卑俗な意味での実証主義あるいは経験主義の見地に立っていることを意味するだけであろう。マルクスの史的唯物論と『資本論』は、この程度の批判に耐ええないほど脆弱なものではないのである。

* T・ガイガーはつぎのようにもいつている。——「マルクスターエンゲルスの史的唯物論は、ヘーゲルの観念論的歴史哲学を逆立ちさせたものにすぎない。彼ら自身は、もちろん、ヘーゲルをもう一度逆立ちさせねばならないと考えた。しかし、だれが頭で立って、だれが足で立つかということは、こうした問題においてはまったくどうでもよいのである。ある一つの形而上学を顛倒したところで、そこにあらわれるものは、それに対立する内容をもった別の形而上学以外のなにもでもありえない。」⁽²²⁾

みごとな形式論理だ！ これこそは、「しらふの哲学」と区別された「酔っぱらいの思弁」(пьяная спекуляция)という意味での形而上学そのものであろう。ガイガーのかかる立言を価値判断するには、われわれはさしあたりマルクス自身のつぎの言葉を想起するだけで十分である。

「私の弁証法的方法は、根本的にヘーゲルのそれと相違するばかりでなく、その正反対のものである。ヘーゲルにとつては、彼が理念という名称を附して一つの自立的な主体に転化しさえした思惟過程が、その外的現象たるにすぎない現実的なものの創造者(Demiurg)である。私にあっては反対に、観念的なものは、人間の頭脳のなかで転変され翻訳された物質的なものにはかならない。」⁽²³⁾

ちなみにレーニンは、マルクスの弁証法を「発展についてのもっとも全面的で深遠な学説」(наиболее всестороннее и глубокое учение о развитии)と名づけ⁽²⁴⁾、かつ史的唯物論の科学的意義をつぎのように評価している。

「唯物史観の発見、あるいはもつと正確にいえば、社会現象の領域への唯物論の首尾一貫した適用および拡張は、従来の歴史理論の二つの主要な欠陥をとりぞいだ。第一に、従来の歴史理論は、ただか人間の歴史的活動の理念上の動機を考察したにとどまり、こうした動機がなにによって呼びおこされたかを探求せず、社会的諸関係の体制の発展における客観的合則性を追跡せず、これらの関係の根底を物質的生産の発展段階のうちに見取しなかつた。第二に、従来の理論は、まさに住民大衆の活動をまったく等閑に附したのであるが、これにたいして史的唯物論は、大衆の社会的生活諸条件とこれらと条件の変化とを自然史的な正確さで研究することをはじめて可能にした。マルクス以前の『社会学』と修史は、たかだか、断片的に蒐集された未加工の諸事実の累積と歴史的過程の個々の側面の記述とをあたえただけである。マルクス主義は、すべての相容れない諸傾向の総体を研究し、それらをさまざまな社会諸階級の正確に規定される生活_{||}および生産諸関係に帰着させ、個々の「支配的」理念をえらびだしたり解釈したりするような主観主義や恣意を排除し、かつ、例外なしにあらゆる理念およびあらゆる種々の傾向の根源が物質的生産力の状態にあることを証明して、経済的社会構成体の発生、発展および崩壊の過程の総括的・全面的な研究への道を示した。」〔力点——レーニン〕⁽²⁵⁾

ともあれT・ガイガー——『資本論』における階級理論の「いっさいの科学的意味」を否定するT・ガイガーは、さらにその歩をすすめてつぎのように主張する。「簡単にいえば、『資本論』のなかでは彼〔マルクス〕の階級概念が宙に浮いている。だからわれわれは、彼の他の著述や、あるいは友人であり協力者であるF・エンゲルスとの往復書簡のなかに散在しているものもろの所説を対象として、それらを蒐集し比較しながら、明らかにしてゆくように努力しなければならない。しかし、そうしたところでわれわれはやはりまた失望を感じる。マルクスは、あるときは上記の三階級〔すなわち資本家・労働者・地主の三階級〕について、あるときは二つの階級〔ブルジョアジーとプロレタリアート〕だけについて、そして他の場所では多数の階級について語っているので

ある。⁽²⁶⁾」

『資本論』のなかではマルクスの階級概念が宙に浮いている！ かかる見解にたいしては、ひとはなんといふべきであろうか。T・ガイガーはただ、つぎの諸点を理解していなかったがゆえにのみ、かように主張することができたのである。すなわち、『資本論』はその全巻がブルジョアの階級諸関係にかんする体系的敘述であるという点、『資本論』における階級理論は抽象的・一般的な性格をおびていると同時に、他方では優れて実証的な性格をもっているという点、したがって、『資本論』が史的唯物論を方法論上の基礎としていることは、そこで敘述されている階級理論の科学的意義をいささかも減殺しないという点がそれである。もしT・ガイガーがこれらの点を正しく把握していたとすれば、彼はまた、『資本論』のなかではマルクスの階級概念が「宙に浮いている」どころか、比類のない厳密さをもって科学的に基礎づけられていることを、みとめたであろう。

ところで、マルクスがあるときは三つの階級について、あるときはたんに二つの階級について、そして他の箇所では多数の階級について述べていること——これはたしかにガイガーのいうとおりである。だが、それだからといって「失望を感じる」にはおよばない。というのは、マルクスがそうしたについては、それ相当の理由があるからである。すなわちマルクスは、資本主義社会一般の内部構造を問題にする場合には、事態を純粋な形で把握するために、『資本論』以外の労作や手紙のなかでも三つの階級（ブルジョア社会の基本的諸階級としての）について語ったのであり、また彼がしばしばブルジョアジーとプロレタリアートだけをとりあげているのは、資本主義社会の内的編成の見地からみてこれら二つの階級がとくに重要な地位を占めているからである。そして最後に、あれこれの国の具体的な経済状態に階級諸関係の分析が問題である場合には、彼は、中間層（手工業者、農

民、小商人、等々）や前期的諸階級をもふくむ多数の階級について述べたのであった。^{*} こうした点にたいする無理解が、やがてT・ガイガーをして、マルクスはあるときは三つの階級について、他のときは二つの階級について、また別の箇所では多数の階級について論じているという理由で「失望」を感じさせることとなったのである。だが、これはもちろんマルクスの罪ではなくて、ガイガー自身の落度である。

* この最後の場合に言及したものとして、われわれはレーニンの論文『カール・マルクス』のなかからつぎの二つの章句を引用しておく。

「一連の歴史的著作においてマルクスは、唯物論的な修史の見事で深遠な模範、すなわちそれぞれの階級や、ときにはまた階級内部のさまざまな集団ないし層の地位を分析する模範を示し、そしてなぜ、またどのようにして『階級闘争はすべて政治闘争である』かを明瞭に証明した。」〔力点——レーニン〕

「マルクスは、プロレタリアートの戦術の基本的任務を、彼の唯物弁証法的世界観のすべての前提と厳密に一致させて規定した。ある与えられた社会の、例外なしに、すべての階級の相互関係の総体を客観的に考慮すること、したがって、この社会の客観的な発展段階を考慮し、この社会と他の諸社会の相互関係を考慮することだけが、先進的な階級の正しい戦術の土台となりうる。この場合には、すべての階級とすべての国が静態においてではなく動態において、すなわち静止の状態においてではなく運動（この運動の諸法則はそれぞれの階級の経済的な実存条件から生まれる）において考察される。この運動そのものは、たんに過去の観点からだけではなく、未来の観点からも考察され、しかも緩慢な変化しか見ない『進化論者』の卑俗な考え方によってではなく、弁証法的に考察されるのである。」〔力点——引用者〕⁽²⁷⁾

(1) K. Marx, Das Kapital, Bd. I, S. 6. 長谷部訳、第二分冊、一四一—一四二頁。

(2) B. H. Jenuu, Cozmeuau, т. 4, cтp. 71. 『レーニン全集』、第四卷、九一—九二頁。

- (3) T. Geiger, Die Klassengesellschaft, S. 59. 鈴木訳、五七〇ページ。
- (4) T. Geiger, ebenda, S. 71. 前掲書、六八〇ページ。
- (5) K. Marx, Das Kapital, Bd. I, S. 679. 長谷部訳、第四分冊、一六五—一六六ページ。
- (6) K. Marx, Briefe, S. 188. 岡崎次郎訳、上巻、二二七ページ。
- (7) В. И. Ленин, Сочинения, т. 21, стр. 44-45. 『全集』第二一卷、四九〇ページ。
- (8) T. Geiger, Die Klassengesellschaft, S. 11. 鈴木訳、三〇〇ページ。
- (9) T. Geiger, ebenda, S. 139. 前掲書、四一〇ページ。
- (10) Vgl. K. Marx, Zur Kritik, SS. 256-258. 宇高訳、三四六—三四九ページ参照。
- (11) K. Marx, Briefe, S. 235. 岡崎次郎訳、下巻、二八二—二八三ページ。
- (12) K. Marx, Das Kapital, Bd. I, S. 17. 長谷部訳、第一分冊、一三四—一三五ページ。
- (13) K. Marx, Briefe, S. 142. 岡崎次郎訳、上巻、一六〇ページ。
- (14) T. Geiger, Die Klassengesellschaft, S. 27. 鈴木訳、二〇〇ページ。
- (15) Vgl. K. Marx, Zur Kritik, SS. 12-13. 宇高訳、一〇—一一ページ参照。
- (16) K. Marx, ebenda, S. 16. 宇高訳、二五〇ページ。
- (17) K. Marx, ebenda, SS. 12-13. 宇高訳、一〇—一一ページ。
- (18) В. И. Ленин, Сочинения, т. 1, стр. 123. 『全集』第一卷、一三四ページ。
- (19) Vgl. K. Marx, Zur Kritik, S. 213. 宇高訳、二九二参照。
- (20) См. В. И. Ленин Сочинения, т. 21, стр. 43. 『全集』第二一卷、四七〇ページ参照。
- (21) R. L. Meek, Studies in the labour theory of value, London, 1956, p. 146. 水田洋・宮本義男共訳『労働価値論史

研究』日本評論新社、一八一—一八二ページ。

- (22) T. Geiger, Die Klassengesellschaft, S. 25. 鈴木訳、一八ページ。
- (23) K. Marx, Das Kapital, Bd. I, SS. 17-18. 長谷部訳、第一分冊、一三六ページ。
- (24) В. И. Ленин, Сочинения, т. 21, стр. 32. 『全集』第二十一卷、三五ページ。
- (25) В. И. Ленин, там же, стр. 40. 前掲書、四四—四五ページ。
- (26) T. Geiger, Die Klassengesellschaft, S. 12. 鈴木訳、四—五ページ。
- (27) В. И. Ленин, Сочинения, т. 21, стр. 42. 『全集』第二十一卷、四七ページ。
- (28) В. И. Ленин, там же, стр. 58. 前掲書、六三ページ。

四　　つ　　び

以上われわれは、T・ガイガーが『資本論』に批判をくわえているかぎりで、それらの批判がどの程度まで正当性を有するものであるかを検討してきたが、これまでの考察をつうじて明らかとなった諸点を、ここに要約しておこう。

(一) 『資本論』では諸階級がたんに経済的諸範疇の「担い手」としてのみ問題にされているという事情、しかもそこでは、経済的諸範疇の理論的展開がなされたのちに最終章ではじめて諸階級が直接のテーマとしてとりあげられているという事情——こうした事情のために、T・ガイガーは、マルクスが社会階級について体系的に敘述しているのは『資本論』最終章においてだけだと考え、かつ、この最終章が未完のままに終わっているという理由からして、「マルクスの社会階級論にはどこにも体系的関連のある敘述がなかった」とま

で主張するにいたった。しかしこれは、彼ガイガーが、『資本論』に適用されている方法と、そこで展開されている経済理論（あるいは階級理論）とをすこしも理解していないことを意味するものにほかならない。

(四) 『資本論』では第三巻第六篇においてはじめて近代的土地所有がとりあつかわれているという事情のために、T・ガイガーは、あたかも「農村社会」と「都市的・産業的社会」とが相互に自立的に存在しうるかのように考えながら、「資本主義社会の構造にかんして描いたマルクスの像は、かなり一義的に都市的・産業的社会に方向づけられていて、農村社会はこれを無視している」と主張した。だが、マルクスにたいするこのような批判はまったく的はずれだといわねばならない。なぜなら『資本論』においては、たんに資本や賃労働の経済的本質だけでなく、近代的土地所有のそれも――差額地代論と絶対地代論の展開をつうじて――全面的に説明されているからである。

(三) テオドール・ガイガーは、『資本論』における階級理論が一定の抽象的性格をおびていることの科学的意義を正しく把握することができず、ためにマルクスの「貧困化理論」を不当に批判して、「それは現実の資本主義ではなく、資本主義にかんするマルクスのイデーにおいてのみ存するものである」、「等々」というにいたった。

(四) T・ガイガーは、『資本論』で採用されている上向法にあつては、一見したところ純粹に演繹的だと思われる敘述の形式が、実は尨大な歴史的・事実的材料を再生産しているという点を洞察することができず、その結果、『資本論』における階級理論の実証的な性格を完全に否定して、マルクスの社会階級論は「帰納的研究の成果」ではないとか、マルクスは「天才的な思いつき」にもとづいて演繹的に事を処理したとか主張

することになった。

(五) 史的唯物論を「形而上学的見解」と見なすT・ガイガーは、『資本論』における階級理論が史的唯物論を基礎としている以上、「それはいつさいの科学的意味を欠如している」と論じ、そしてついには、『資本論』のなかではマルクスの階級概念が「宙に浮いている」とまで極言するにいたった。だが、これはとりもなおさず、ガイガーが史的唯物論と『資本論』との科学的意義を正しく評価していないことを意味するものにほかならない。けだしマルクスは、その経済学的研究にさいしては、史的唯物論を「みちびきの糸」としながらも、同時に、イギリスその他の資本主義国の具体的な経済状態とブルジョア経済学の歴史とにかんする大量の文献を克明に検討したのであり、そしてそのかぎり、『資本論』における階級理論が史的唯物論を基礎としているという事実はこの階級理論の科学的意義をすこしも減殺しないからである。

これらの点が、本稿におけるわれわれの考察によって判明した主要な諸点である。かくてわれわれは、いまやつぎのようにいうことができよう。――『資本論』にたいしてなされたT・ガイガーの批判はそのほとんどすべてが、『資本論』に適用されている科学的方法と、そこで展開されている経済理論―階級理論とにたいする不十分な理解（というよりも完全な無理解）にもとづく不当なものであり、したがってまた、彼が『資本論』にむかって放った批判の矢はいずれも完全に的をはずれている、と。実際、T・ガイガーは、もし彼が『資本論』の方法と内容を多小なりとも理解していたならば、われわれが見てきたような種類の『資本論』批判をあえて試みようとはしなかつたであろう。またその場合には、おそらく彼は、「マルクスの理論構成は古くて問題にならない」とか、「おどろくべきは、あれほど拙劣に書かれた、間延びして退屈千万な『資本論』のごとき部厚な本が⁽¹⁾

「労働運動の聖典になりえたことである」⁽²⁾などと書くことも、さしひかえたであろう。こんなふうを書くまえに、テオドール・ガイガーは、『資本論』そのものをもつと根気よく、もつと丹念に、もつと綿密に読むべきであった。——ともあれ、これが、T・ガイガーの『資本論』批判にかんするわれわれの結論である。

(1) T. Geiger, Die Klassengesellschaft, S. 139. 鈴木訳、一四一ページ。

(2) T. Geiger, ebenda, S. 141. 前掲書、一四四ページ。